

○ 宮崎県における梅毒の流行状況の解析

・水流奈己 吉野修司<sup>1)</sup> 山中篤志<sup>2)</sup> 佐多章<sup>2)</sup> 松浦良樹<sup>3)</sup>

「第72回日本感染症学会東日本地方会学術集会第70回日本化学療法学会東日本支部総会合同学会」 (令和5年10月25日～27日 東京都)

1) 元微生物部 2) 県立宮崎病院 3) 社会医療法人同心会古賀総合病院

[目的]

近年、全国的に梅毒患者が増加している。宮崎県においても、2023年5月末時点の累積届出数は昨年約2.5倍となっており、今後も増加が懸念される。宮崎県における流行状況等を把握するため、梅毒陽性患者の検体を確保、遺伝子検出を実施し、あわせて性的接触等のアンケートを行った。

[方法]

2022年7月～2023年5月に県内5ヶ所の医療機関で44名の梅毒陽性患者から、病変部の浸出液12件、唾液44件、残余血液7件の検体を回収し、患者の性的接触等についてのアンケートを行った。検体はTpN47をコードする遺伝子及び梅毒トレポネーマのDNA polymerase 遺伝子内の菌種特異領域を検出するPCR法を実施した。なお、上記の方法が陰性だった場合には、Nested PCR法を実施した。

[結果]

遺伝子検査の陽性率は、浸出液が約58% (7/12件)、唾液が57% (25/44件)、血液が29% (2/7件)であった。アンケートの結果は、推定感染原因とされる性的接触のうち風俗関係が2022年7月～12月においては約61%であったが、2023年1月～5月にかけては約19%と低下した。

[考察]

遺伝子検査が、梅毒の診断における補助となることが示唆された。また、侵襲性のない唾液検体における遺伝子検査の有用性が示されるとともに、唾液の感染リスクについて検討する必要があるものと思われた。宮崎県における性的接触機会は風俗従事/利用といった限られた範囲からパートナーからの感染へと移行しており、さらなる感染の拡大が考えられた。